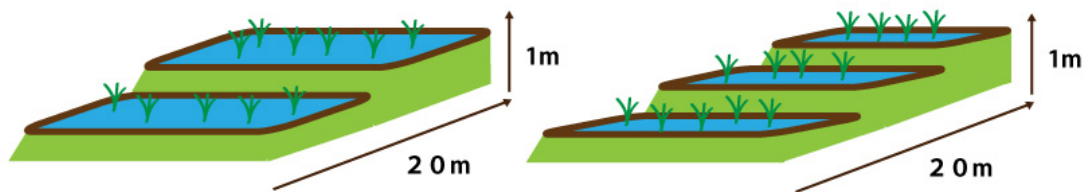


日本とアジアをつなぐ風景：棚田【寄藤 昂】

UNESCOの世界遺産には現在フィリピン・ルソン島、インドネシア・バリ島、中国・雲南省の3箇所の「棚田」が登録されている。

棚田とは、山の斜面や谷間の傾斜地に階段状に作られた水田である。日本では、山がちなところではどこにでもみられる水田形態で、日本にある約250万haの水田のうち約22万ha(8%)が棚田だといわれている。その中でも、人の目に触れることの多かった能登白米や信州嫉捨の棚田はよく知られ、その景観の美しさが文学作品にも描かれてきた。一枚一枚の面積が小さく、傾斜地で労力がかかるため、中山間地域の過疎・高齢化にともなって、1970年代頃から減反政策の対象として耕作放棄され始め、今では40%以上の棚田が消えているといわれる。



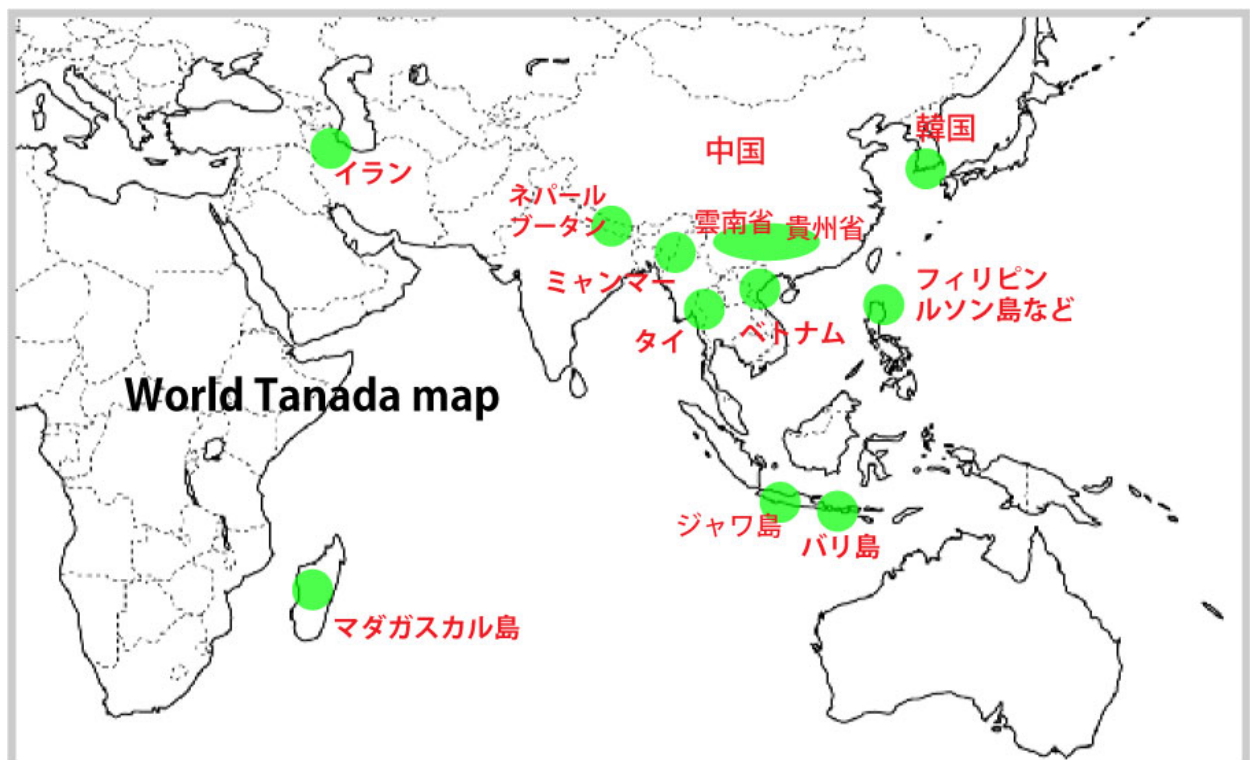
棚田に関して、日本では農水省が便宜的に定めた「傾斜1/20以上」という区分があり、中島峰広早稲田大学名誉教授（NPO法人棚田ネットワーク代表）がそれを用いて「全国棚田分布図」を制作したこともあって一般化しているが、世界的には明確な定義は存在しない。

棚田の機能は「多面的」であり、本来的な機能として「食糧生産」「保水」「洪水調整」「国土保全」「生態系保全」があげられるが、近年では「観光資源」としての評価も高まっている。

日本国内の棚田は極端に面積が少ない埼玉・東京・沖縄を除いて全国に存在する。その中で卓越する地域は、新潟県の頸城丘陵、岡山県の吉備高原、大分県の阿蘇・九重火山山麓といったところで、西南日本（富山ー岐阜ー愛知以西）に約2/3が集中している。

世界の棚田はモンスーン気候の東南アジア山岳地帯に多く見られ、なかでも世界遺産に登録されているフィリピン・ルソン島北部のコルディリェーラ自治地域の棚田群、中国雲南省南部紅河ハニ族イ族自治区の大規模な棚田群、観光地として名高いバリ島のウブド近郊の棚田、という3地域は特に有名である。確認されているところでは、イランのカスピ海沿い、アフリカ・マダガスカル島にも棚田があると言われている。

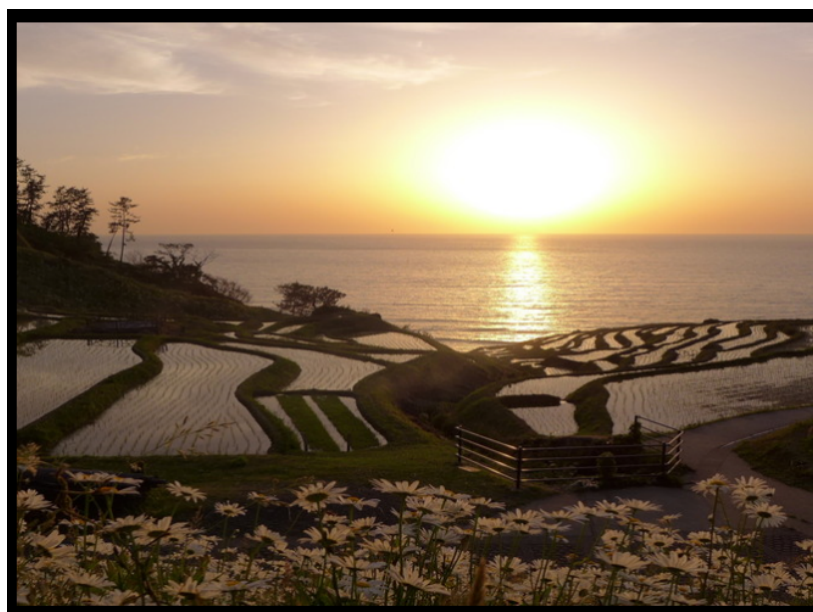
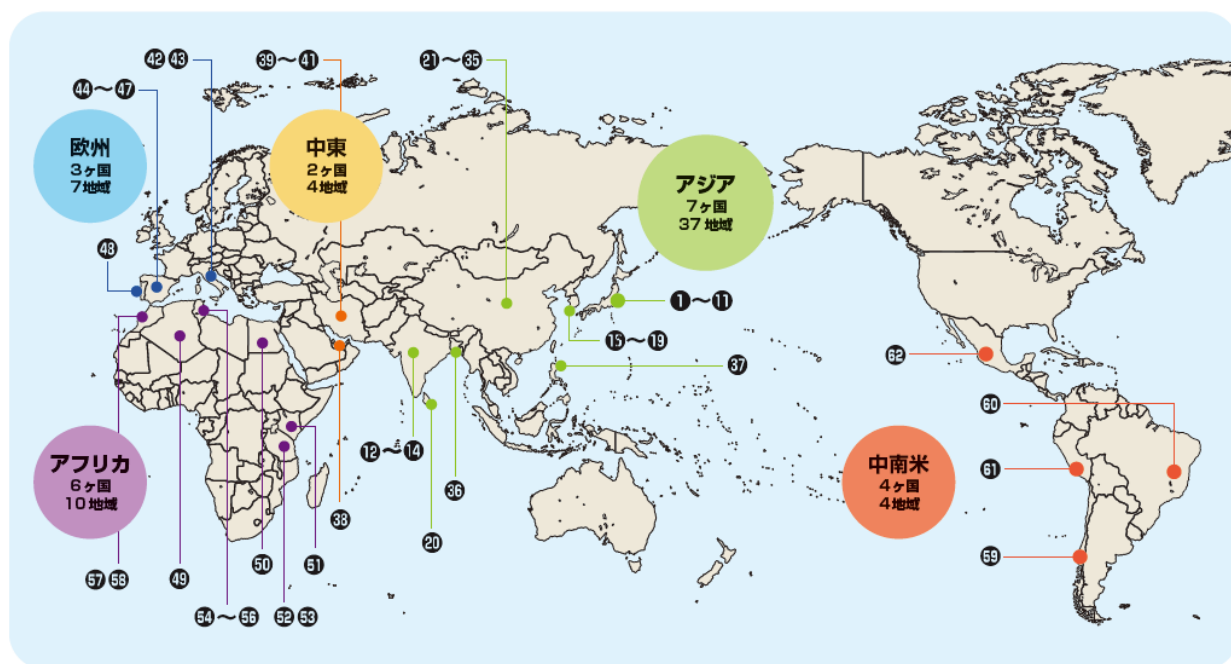
今回は、上述のフィリピン・コルディリェーラ自治地域と中国雲南省南部紅河ハニ族イ族自治区の大規模な棚田群を取りあげる。



世界農業遺産とは

世界農業遺産（GIAHS）は国際連合食糧農業機関（FAO）が認定するもので、「社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業」と、それに密接に関わって育まれた「文化、ランドスケープ及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統的な農林水産業を営む地域（農林水産業システム）」を対象としている。

2005年に創設されて2010年から本格化、2022年4月現在では世界で22ヶ国62地域、日本では11地域が認定されている。棚田については、世界遺産登録のフィリピン・コルディエーリアと中国・雲南が認定されているがインドネシア・バリ島は外れている。棚田ではこの他に日本の能登（白米千枚田を含む里山里海）と中国の南部山岳地域（主として広西チワン族自治区）、韓国の青山島のグドウルジャン棚田灌漑管理システムが認定されている。



石川県 輪島市 白米の千枚田

日本の農業の原風景といえる白米千枚田。世界農業遺産に認定された「能登の里山里海」の象徴的な棚田です。1004枚の棚田は、春夏秋冬様々な景色が見るものを魅了します。特に10月13日から始まる「あぜのきらめき」では、約25,000個ものLEDイルミネーションがあぜを彩り来場者を魅了します。

フィリピン・コルディリェーラの棚田群

1995年に登録されたフィリピン・コルディリェーラの棚田群は、フィリピンのルソン島北部イフガオ州の中央山岳地帯の主に東斜面に広がる棚田地帯。棚田の規模としては世界最大ともいわれている。コルディリェーラはスペイン語で山脈を意味し、標高1,000メートルを越える峰々が多数存在している。

イフガオ州は6州1特別市によって構成されるコルディリェーラ自治地域（CAR）のうちの1州であり、「イフガオ族」と総称される複数の少数民族が居住する。地域の主たる生業は約2000年前から続く棚田での稲作であり、等高線に沿って急傾斜地に広がる棚田は「天国への階段（Stairways to Heaven）」とも称され、伝統的な農事暦にしたがって栽培が行われてきた。中心地域のバナウエの谷を覆う棚田の泥壁や石垣をつなぎ合わせると長さ2万kmにも達するとされる。また、バダットやボントックにも大規模な棚田が広がっている。

この棚田群は、人類が地形的な制約を克服して開発、人間の生命活動を実証した見事な傑作と評価されて世界遺産に登録されたものである。

しかしながら、登録後には村民の村離れによる後継者不足などから放棄される棚田が増加し、水利システムの停止と斜面崩壊、大ミミズによる被害なども加わって、荒地化や畑への転作による景観の悪化、管理計画の不備などを理由に2001年、危機遺産リストに登録されてしまった。その後、国内と日本を含む国外からの支援を受けて、地域住民の主体性を生かした伝統技法による棚田保全が精力的に図られ、2012年に危機遺産リストからの削除を果たしている。



紅河ハニ棚田群の文化的景観

2013年に登録された紅河ハニ棚田群は中国雲南省南部にあり、その面積は16,603 ha に達する。また周辺には29,501.01 ha の緩衝地域（バッファゾーン）が設定されている。

特徴である壮大な棚田群はアイラオ山の斜面から紅河のほとりまで続き、森林に覆われた山頂から棚田に水を運ぶための複雑な水路システムが、ハニ族を中心とする住民の手によって過去1300年にわたって開発されてきている。

彼らはまた、地域の主要作物である赤米の生産に水牛、牛、アヒルの飼育、魚、ウナギの養殖を含めた統合的な農業システムを作ってきた。住民は山頂の森と棚田の間に位置する82の村で伝統的な茅葺きの「きのこ」型の家に住むとされているが、実は2000年以降に地方政府が補助金を付けてこの伝統住居への回帰・改築を進めてきたもので多分に観光を意識した住居となっている。

水路網を中心とする棚田の土地管理システムは時代を超える社会的および宗教的構造に基づくもので、視覚的にも生態学的にも人々とその環境を高度に調和する強靱なものとなっている。

地域は雲南省南部の紅河ハニ族イ族自治州に属し、住民はイ族、ハニ族を中心とするチベット系の少数民族が8割以上を占めている。



「第1回イフガオ棚田評価国際サミット2022」の協力体制

